

# こんにゃくの在来種およびはるなくろの 植付時期と生育・収量

## 1. 試験のねらい

近年、温暖化などの気象変化や規模拡大化などにもない、こんにゃくの植付時期を遅らせる場合がしばしばみられる。また、植付は萌芽の早い高年生から行き、生子は遅植えされる傾向にあるが、それらが肥大に及ぼす影響を検証することを目的とし、試験を行った。

## 2. 試験方法

平成2年～3年の2カ年にわたり在来種およびはるなくろを用い、1年生と2年生について植付時期を5月17日から1週間おきに6月14日までの5時期とし、それぞれについて生育・収量等を比較検討した。

## 3. 試験結果および考察

- (1) 球茎肥大率の分布をみると5月17日植付では肥大率の低い生育不良球（2倍以下）が多いが、良好に生育した肥大率の高いもの（6倍以上）の割合も高い、一方、6月7日以降の植付では生育不良球は少ないが、肥大率の高いものの割合も下がり、球茎の揃いは良くなる。（図-1）
- (2) 2年生では球茎収量に有意差はみられないが、5月31日植付が多い傾向があり、生子収量は植付時期が遅くなるにつれて生子1個重の減少により少なくなる。
- (3) 1年生では球茎収量は植付時期が極端に遅く（6月中旬）になると少なくなる。二段球率は5月下旬までの植付で多い傾向がある。生子収量も植付時期が遅れるにしたがって少なくなる。（表-1）
- (4) 出芽期・開葉期は植付時期が遅くなるにしたがって遅くなり、植付から出芽までの期間は短くなるが、成熟期には差はない。そのため生育期間は短くなる。（表-2）
- (5) 病害や欠株率は有意差は認められないが、2年生では植付け時期が遅くなるにつれて少なくなる傾向がみられる。

## 4. 成果の要約

こんにゃくの植付時期は早いほど肥大は良いが病害の発生も多く、遅いほど球茎の揃いは良いが、生子収量は期待できない。また、1年生では植付が極端に遅くなると収量が劣る。したがって、病障害、肥大性および生子収量の点から、品種・年生にかかわらず、5月下旬の植付が適当であると考えられた。

（担当者 作物部 木村 守・倉井耕一）

表-1 収量調査 (平3在1年)

項目	総球莖重	肥大率	生子重	生子1個重	生子着生数	二段球率	休眠球率
区名	kg/a	倍	kg/a	g	個/株	%	%
5/17	92.6	7.0	10.0	4.0	1.0	8.4	2.5
5/24	93.1	7.6	10.7	4.2	1.1	16.0	3.2
5/31	85.7	6.9	5.0	3.4	0.6	15.7	4.5
6/7	100.4	7.4	10.0	4.2	0.9	9.4	1.6
6/14	68.2	6.0	5.6	3.2	0.8	5.6	4.5
検定	**	*	ns	ns	ns	ns	ns
LSD(10)	4.3	0.7					
1年生子	85.4	6.9	8.7	3.9	0.9	12.5	3.2
2年生子	90.6	7.0	7.8	3.7	0.9	9.5	3.2
検定	*	ns	ns	ns	ns	ns	ns

注. \*\*,\*,+,はそれぞれ1%, 5%, 10%水準で有為であることを示す。

表-2 生育観察および調査 (平3在1年)

項目	出芽期		開葉期		植付-出芽	出芽-開葉	葉身長	葉柄長	9月4日調査		成熟期	
	月	日	月	日					日	日	cm	cm
5/17	6	29	7	4	43	5	19.5	13.3	25.0	9.3	10	1
5/24	6	28	7	4	35	6	18.9	11.9	32.6	19.6	10	4
5/31	7	2	7	9	32	7	17.7	12.1	25.4	8.9	10	3
6/7	7	1	7	8	24	7	19.1	13.2	21.8	10.7	10	1
6/14	7	8	7	14	23	6	17.0	11.1	34.8	3.5	10	2
検定	*	*	**	*	*	*	*	*	ns	*	ns	ns
LSD(10)	4.1	3.7	4.1	0.7	1.4	1.2	8.1					
1年生子	7	1	7	7	31	6	18.2	12.5	28.8	11.6	10	3
2年生子	7	2	7	8	32	6	17.8	11.5	27.1	9.2	10	1
検定	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns

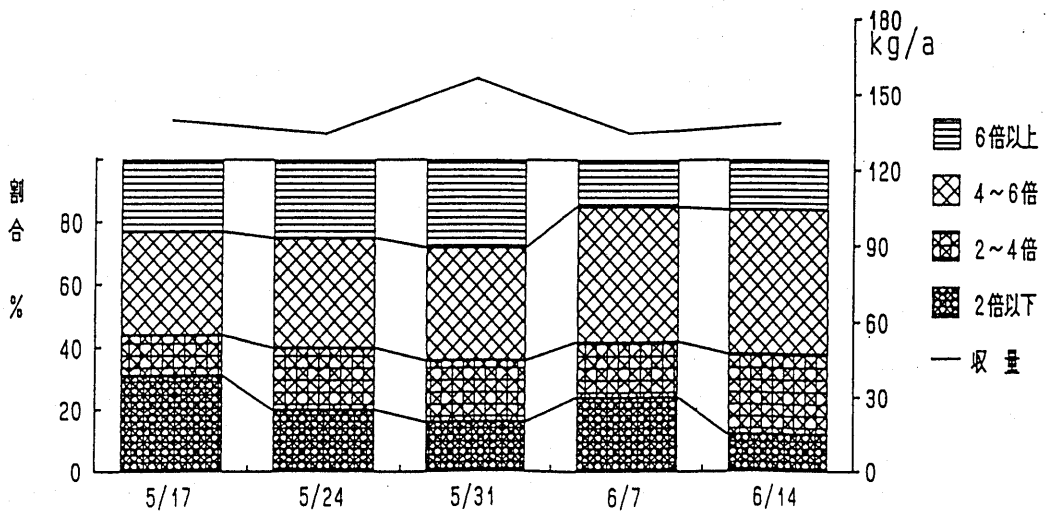


図-1 植付時期別球莖の肥大率の分布と収量 (平2 在来2年)